

【特集：橋本毅彦先生ご退職記念】

橋本毅彦先生との29年

鈴木 淳¹

初めて橋本毅彦先生の御面識を得たのは、私が東京大学教養学部の歴史学教室に着任した1994年のことであろうか。実は残念ながら初対面に関する記憶がない。着任早々にどなたかに紹介されたのか、あるいは日本産業技術史学会という、帰属意識が低い会員が多い学会で先にお目に掛かっていたのかもしれない。学年は離れていたが高校の先輩でもあり、いつも笑顔で話を聞いて下さるので、つい甘えてお世話になり、私の博士論文「明治の機械工業」の審査にお加わりいただいたのを始め、いろいろと御教示を得た。

私は文学部の日本史学、当時の名称では国史学科で日本近代史を学んだ。日本近代史には政治史と経済史のゼミがあり、それぞれ法学部や経済学部の研究者と交流があったが、私は後者で、大学院に6年在籍した後、東京大学社会科学研究所で2年間、経済系の助手として研究させてもらった。経済学研究科の院生が一橋大の斎藤修先生をお招きした演習に参加して英語の論文を読まされたこともあったので、日本の経済史を各国と対比して見ることを教わってはいたが、自分の研究を国際的な文脈の中でとらえ直す面白さを理解したのは、橋本先生のおかげであり、深く感謝している。

私の研究は、民間産業に用いられた機械がどう作られ、使われたのかを辿るもので、その全体的な動向は経済史の中で位置づけられる。しかし、なぜ、どこまで国内生産がなされたのか、といったことを考えると、学校教育を受けた技術者と、現場で熟練を積む技能者それぞれの生成や役割分担、あるいは、機械製造技術そのものの評価が課題になる。これに関しては史料が断片的、主観的で、どうとらえてよいか、手探りの状態であった。これに対して、橋本先生は「暗黙知」の概念や、アメリカ式生産方式の生成を巡る欧米での議論などを教えてくださり、私の力不足で生かし切れなかったが、博士論文をとりまとめ、

1 東京大学大学院人文社会系研究科教授。

また書籍化する助けとなった。そして、橋本先生と話しているうち、国内外、経済史・経営史と科学史にまたがって、産業と技術との関係を描く「産業技術史」が展望できるのではないかと考えた。そこで、学生に伝えながら互いに学んで更にアイデアを練ろうと、同じく産業技術史学会の会員であったイギリス科の草光俊雄先生と3人で「産業技術史入門」という全学ゼミを開講した。ところが、調子に乗って私が授業案内を書いたのがまずかったらしく、初回の教室に来た学生は1人だけであった。あわてて、それぞれ知り合いの学生を勧誘し、愛知県に見学旅行に行ったりもしたことは、良い思い出である。近年文学部に迎えた同僚がこのゼミに参加していたと聞き、橋本先生が定年を迎えられるのも不思議ではない年月が経ったことを感じた。もっとも、件の若き同僚も「産業技術史」が何なのかはよくわからなかったようである。

その後、『遅刻の誕生－近代日本における時間意識の形成』（三元社、2001年）という本に結実する、国際日本文化研究センターで後にハーバード大に移る栗山茂久先生と橋本先生とが組織した研究会にお誘いいただいた。京都での合宿で、主にアメリカで研究して来た御二人の共通理解、問題意識と、主に日本で活動してきた諸分野研究者の議論を、日本語で聞いたのは大変刺激的で、歴史にはこんなにも幅広く、論じるべき課題があるのか、と心強く感じた。引き続き時計の研究プロジェクトにもお誘いいただき、和時計の解体調査に参加するといった貴重な機会を得られたが、この時には私が締め切りに数日遅れて報告書の原稿を落とすという失態を演じた。まさに「遅刻の誕生」のような話だが、掛値なく締め切りを示し、淡々と作業を進める橋本先生の冷徹な一面を知り、更に尊敬の念を深めた。橋本先生は懲りずに、『安全基準はどのようにできたか』（東京大学出版会、2017年）に結実する研究会にもお誘い下さり、実務者や、実務経験のある研究者から技術の捉え方を聞く機会を多く得られたこともありがたい経験であった。

日本語で講義するより英語の方が楽しいとおっしゃる橋本先生は、私にとって世界への窓口であった。もう一つの窓口であった斎藤修先生に迫られて英語で論文を書かざるを得なくなった時にも、いろいろ知恵を貸して下さったのだが、その後私は日本語でしか書けずに終わっており、御厚意を無にした点は申

し訳なく思っている。日本の先行研究と史料だけを見て書く論文を英語に訳しても英語の論文にはならないことを教えてもらったが故に、文学部日本史学研究室に転勤した私が、国内の史料を利用した研究を続けることを優先したと言いついておく。一方で、英語圏での日本研究を勉強する機会を得たいという思いは残り、ダニエル・ボツマン教授の御協力を得て2012年に半年だけイエール大学に滞在してわずかな経験を得た。その間に橋本先生が用事があったワシントンから列車で来たと言って顔を見せて下さり、アメリカ人研究者と歓談される姿に、やはりアメリカは橋本先生がいる世界なのだ、と妙に納得した。

この機会に改めて振り返り、橋本先生が、私の教員としての生活をどれほど知的に豊かなものにしてくれたか再認識し、感謝の念に堪えない。残念ながら、時間と能力の不足のため、いただいた刺激の幾許も生かしてはいないのだが、今後とも、御教示頂きながら取り組んでいければと思う。